Original Paper
［査読有り］原著論文

女性性の倫理的自由とフランス革命期のフェミニズム論
—ルソーからウルストンクラフトへ—

Women's ethical freedom and feminism of the French revolutionary period
-From Rousseau to Wollstonecraft-

武田　千夏
大妻女子大学比較文化学部

Chinatsu Takeda
Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：フェミニズム，共和主義的母性言説，穏和な商業論，ルソー，ウルストンクラフト
Key words：Feminism, Republican motherhood, Doux commerce theory, Rousseau, Wollstonecraft

抄録

本論文は，フランス革命期が生み出したフェミニズム論を理解する手がかりの一つとして「女性性に由来する倫理的自由」の概念に注目する．この視点からウルストンクラフトを啓蒙フランスから革命フランスの知的文脈に位置付け，ルソーがウルストンクラフトのフェミニズム論に対して及ぼした影響について考察する．穏和な商業論は，男性論客の相互に対立，矛盾する意見を総合して妥協点を生み出すことを可能としたサロンの女主人の節度（会話の技巧）を社会道徳の重要な心理要素とみなした．ルソーはこの言説に敵対し，女性の生殖機能を社会道徳の基礎と捉え，共和主義的母性言説を刷新した．ウルストンクラフトはルソーの女子教育論に反発する一方，ルソー同様に穏和な商業論が象徴したサロンの女主人のイメージを拒絶し，社会的側面ではなく生物的な側面を女性性の本質とした．その結果，ウルストンクラフトが政治的人文主義に感化されて女性参政権を拠り所とする共和主義的フェミニズム論を展開したと解釈し，それは同時に「近代人の自由」と呼ばれた市民権の擁護に制約を課したことを指摘する．

序論：米仏における共和主義的母性言説の違い

フランス人女性がフランス革命により獲得した権利は，公私の違いによって大きな隔たりがあった．彼女たちは為政者，投票者になることはできなかったが，家庭内では男性と相対的に同等の市民権を得た．一七九一年憲法は結婚の概念を世俗化させ離婚を合法化した．成年男女は父母の同意なく結婚できるようになり，財産管理権，親権，相続などの男女平等も認められた．家庭内に問題があれば，女性は裁判所に持っていくこともできた．

しかしナポレオン法典（一八〇四）は女性を父，夫などの男性の絶対的支配に置くという「パターファミリア」を復活させ，家内にも男女の不平等を持ち込んだ．妻は夫の同意がなければ裁判への出頭，固有財産の譲渡，債務の負担などの行為を許されず，夫婦の共有財産の管理権も否定された．最後に，離婚も第二王政復古政権により一八一六年に復活した．これ以後，家庭内の男女の不平等は二十世紀の後半まで続いた[1]．

フランス革命期からナポレオン帝政期にかけてフランス人女性は政治的権利から排除された[2]．それとは対照的に家庭内における男女の相対的な市民的平等を実現させたのが一七九一年憲法を発布した立憲君主政政府だった．これに対して議会主義を否定して専制主義を進めたナポレオンの第一帝政は家庭内の女性の地位も低下させた．その一方で，家庭内における男女の役割分担化はフランス革命期から帝世紀まで一貫した動きだった．とりわけ一七九〇年代のフランス革命期を通じて，家庭内で女性の良妻賢母化を

後押ししたイデオロギーが共和主義的母性言説だった[3].

古代ヨーロッパの共和政は，男性を公的な存在，女性を私的な存在とみなした．この公私の区分により，男性は市民として政治参加に従事する一方，女性は良妻賢母として家庭内の活動に携わるべきとされた．このジェンダー・イデオロギーは政治的人文主義の一部として近世に復活し，十八世紀後半までに共和主義的母性言説として知られるようになった．そしてアメリカ，フランスの民主革命におけるジェンダー秩序の再編に多大な影響を及ぼした[4].

先行研究は市民革命を経たという理由から，アメリカとフランスの共和主義的母性言説の共通点を強調する傾向にある[5]．これに対して，本論文は市民革命期から十九世紀にかけてのアメリカとフランスの共和主義的母性言説の違いに注目する．アメリカでは一部の中産階級の家庭では母親が「未来の男性投票者の公民教育」という政治的役割を担い，それが女子教育の直接的な契機となった．アメリカの研究者はこれを持って共和主義的母性言説とフェミニズムを結びつける．それに加えてアメリカの中産階級の女性の理性を重視する背景にはプロテスタント信仰の影響もあった[6].

これに対してフランスの共和主義的母性言説には母親が未来の男性市民である息子の政治教育を担うという側面は強調されない．十九世紀を通じて，アメリカ女性とは異なり，フランスの女性は理性ではなく宗教を中心とする教育を受けた．さらに夫に対する従順さを強調するカトリック信仰が主流のフランスの家庭では妻母を積極的に「共和政の推進者，教育者」として後押しして自立を志向するプロテスタント信仰に呼応する宗教的土壌もなかった．本論文は，フランスで良妻賢母像を合理化したのがプルタルコスを中心とする古典文学の影響を受け継いだ J.-J. ルソーの共和主義的母性論だったと考える．

これらに加えて，本論文はアメリカにはないフランスの共和主義的母性言説の特徴として，啓蒙フランスが誇るサロンの女主人およびこの女性像を模範とする穏和な商業論が反面教師としての役割を果たした点を重視する．ルソーはフランス王政を特徴づける穏和な商業論を否定し，生物的女性を女性性の倫理的根拠とする共和主義的母性論を完成させた．本論文はフランス文化に馴染んでいたイギリス人の M.ウルストンクラフトも穏和な商業論に反発してルソーの共和主義的母性論の女性性の定義を自身のフェミニズム論に取り入れた点を重視する[7].

以上の展望に立ち，本論文は以下の四つの論点を中心に議論を進めていく．第一に，啓蒙フランスのサロン，及びサロンの女主人について紹介する．第二に，啓蒙時代の穏和な商業論と自然法の女性性を比較しつつ，穏和な商業論がサロンの女主人を女性性に由来する社会道徳モデルを生み出したことを示唆する．第三に，第二の論点に対して，ルソーが穏和な商業論およびこのイデオロギーが象徴するサロンの女主人を否定して共和主義的母性言説を刷新させたことを指摘する．第四に，ルソーの生物的な女性性に由来する社会道徳がウルストンクラフトのフェミニズムにも影響を及ぼしたことを指摘する．結論として，リベラル・フェミニストとして知られてきたウルストンクラフトのフェミニズム論を女性性の倫理的自由の視点から再解釈する[8].

(1) 啓蒙フランスのサロン及びサロンの女主人

近世フランスにおいてフランス人女性の地位は全般的に低下した[9]．しかしこの一般的傾向には例外があり，貴族を中心とする上層階級の女性の存在感は時代と共に強まった．その象徴的存在がサロンの女主人である[10].

一六〇八年にパリに第一号のサロンを開いたのは C.V.ランブイエ侯爵夫人だった．彼女のサロンは「青い部屋」と呼ばれ，社交界や芸術界のエリートが招かれた．そこは知識や情報を求める女性たちが男性知識人と対等に語り合うことのできる知的空間だった．彼女たちはその後プレシューズ（précieuses）と呼ばれるようになり，十七世紀の文化運動を牽引し，フランス語やフランス文学の発展に大きく寄与した．加えて，彼女たちはその貞節さゆえに社会の道徳的権威の化身となった．

長年の宗教戦争による暴力を否定するために，サロンには文化の発展を通じて平和を擁護すると言う社会的役割が託された．つまりサロンの女主人たちは，洗練された言葉使いやウイットに富んだ会話を通じて，戦士として荒くれた性

格を持ちあわせていた上層階級の男性たちを文明化させることを目指しそれにより平和な社会を築こうとした．さらにパリという都市部に在り，かつ女性の自宅の居間という親密圏に位置付けられたサロンは，伝統的な家父長制の規範と粗野なマナーが残るヴェルサイユ宮殿に対する対極でもあった．

十七世紀を通じて国家の中央集権化，絶対王政化が深化すると，サロンは次第に政治的な要素を帯びていった．サロンの女主人は，豊富な人脈を利用して宮廷人脈を後方支援するパトロネージュ活動を展開した．サロンでは，会話や新しい芸術作品だけでなく，官僚の庇護に加えて，地位，富，娘なども交換されるようになった[11]．さらにサロンの女主人たちはブルジョワと貴族をつなげてエリート層の拡大にも寄与した[12]．サロンは節度の学校として機能し，新興の裕福な中産階級の男性たちに高貴な礼節の手本を示す場となった．その後サロンの女主人は宮廷人脈を後方から操って，王や政府にまで影響を及ぼし始めた[13]．この頃までにサロンの女主人は貞節のモデルではなくなった．

十八世紀になると，パリのサロンは文化的な爛熟期を迎えた．D.グッドマンによれば，この時代のパリのサロンは，それ自体が共和主義国家を思い起こさせる特徴を持ち始めた[14]．S.ネッケル夫人ら政治的な傾向を持つサロンの女主人は共和国の行政府に類する役割を果たし，会話の内容，会話の順番，招待客のリストなどをお膳立てし，家庭内共和国を支配した[15]．D.ゴードンは，十八世紀後半のフランスのサロンとは，身分制が支配する宮廷社会とは一線を画す自由で私的な空間だったと指摘した．その原動力は「進歩的な会話」のパワーに基づく平等な社交性だった．ゴードンによれば，サロンとはあくまでも絶対王政内の「例外的なニッチ」として私的に自由な会話を楽しむ場であり，それはフランス革命を特徴づける政治化された社会空間ではなかった[16]．

J.ハーバーマスはパリのサロンを市民的公共圏の視点から捉えた[17]．絶対王政に代表される公権力が可視化されるにつれてそれに対する批判的な公衆も誕生した．彼によれば，十八世紀を通じてイギリス，フランス，ドイツなどでは資本主義の発達とともに，宮廷の影響を排した新たな社交のネットワークができあがりつつあった．それは公私の二極化の中間に位置付けられる半公半私的な社会空間でもあった．そして「カフェ，若者の宿舎，劇場，オペラハウス，都市の公園」と同様，サロンもその社交のネットワークの一部として人々の間の平等な対話を後押しした[18]．一七八一年に当時財務大臣だったネッケルはそれまで機密情報だったフランス王国の財務状況を初めて公表した．ハーバーマスはこのネッケルの行為により，公論が歴史的に誕生したと解釈した．

しかしながら，ハーバーマスの公論誕生についてはジェンダーの視点からの補足説明が必要である．なぜなら，ネッケルが絶対王政下の状況のもと，全く孤立した状態で財務状況を発表していたら，その影響は限定的だったと思われるからである．彼の自己正当化のための政治行為に対して，妻スーザンが自身のサロンに集う錚々たる招待客に出版や会話を通じて夫への支持を取り付けたからこそ，ネッケルの行為は好意的な社会的反響を引き出し長期的な公論形成へとつながった．

アブランテス公爵夫人によれば，当時人々はネッケル夫人を公論と同一視していた．彼女の証言から，啓蒙フランスにおいてサロンの女主人が市民的公共圏形成においても中心的な文化的役割を果たしたことが確認できる．

> ネッケル夫人の時代には，社交界の精神，出会いの必要性，尊敬の念，相互賞賛が，社交界のすべての人々が比較することを義務づけられた法廷にまで高められていた．そこで公論は，まるで玉座の高みから判決を下し，王冠を与えるかのようだった・・・世論の帝国はついに巨大なものとなり，この帝国は一人の女性によって統治されていた．サロンの女主人は自分の家で下される判決を取り仕切った．彼女の心，彼女のセンスによって，判決は編集され，彼女の心は，常に彼女の心の側にいて，それが誤った道を歩むのを防いだ[19]．

ハーバーマスによれば，イギリスと比べた時，フランスでは資本主義の発達が立ち遅れ，それ

に伴いブルジョワ公共圏の形成も遅れた．つまり市民的公共圏の形成に関して劣勢に立たされたフランスだが，この国には同時にイギリスの公論にはない独自な文化的伝統があった．それが，ネッケル夫人の例に見られるサロンの女主人を含む上層階級の女性たちの社会的な可視性および彼女たちによる文化活動である[20]．十八世紀後半のフランスでは，上層階級の女性たちは，サロンの主催，観劇，読書クラブへの参加を通じて，より大衆的なレベルでは政治デモなどへの参加を通じて，女性がパブリックな存在感を発揮した[21]．

女性史の研究者たちは，ジェンダー史における啓蒙フランスのサロンの女主人が謳歌した社会的，文化的自由の歴史的意味を否定する．彼女たちは総人口から見たら二パーセント未満の特権階級に属するサロンの女主人の影響を持って絶対王政期のフランス女性の地位について一般化することはできないと解釈する．また革命によって少数派の上層階級の女性たちの文化，社会的自由が奪われてしまったとしても，それによってフランス革命がフランス女性全体の地位を下げてしまったと結論づけることにも納得しない．C.ル・ボゼックはサロンの女主人について以下のように書いている．

> 「女性解放と自由のモデルとしてサロンを提示することで，逆に，フランス革命がその様な自由を奪い去ったと主張しようとする者たちの，限定的で短絡的な理解こそ，ここでは問題しせねばならない・・・・より具体的な現実を理解しようと努めなければならない」[22]．

本論文は，ル・ボゼックらの意見は女性史とジェンダー表象を混同していると考える．確かに，サロンの女主人の数はフランス女性の全体数から見たら微々たるものであり，彼女たちのフランス革命への影響は極めて限定されていた．しかし本論文はサロンの女主人の社会的可視性を女性の数ではなくジェンダー表象の視点から捉える．そしてサロンの女主人像が，啓蒙哲学からフランス革命期までのフランスにおけるジェンダー（社会，文化的な女性性の定義）形成に対して多大な影響を及ぼしたことに留意する．

(2) 啓蒙哲学における女性性の倫理的意味：穏和な商業論と自然法

啓蒙哲学とは，十八世紀フランスにおいて，サロンの女主人がもっとも表象的に捉えられた領域の一つである．本節は同じ啓蒙時代に発達した穏和な商業論と自然法哲学におけるそれぞれの女性像を比較し，穏和な商業論に込められたサロンの女主人が示唆する女性像の特質を浮かび上がらせる．

十八世紀になると穏和な商業論の発達と共に，フランスにおける女性性に関する哲学議論は重大な転換期を迎えた．穏和な商業論とはフランス語の *Doux commerce*，つまり「柔らかい交流」の日本語訳である．それは平和と文明の存続が広い意味の社会交流によって支えられるとの前提に立つ．貿易，経済交流，会話，社交性などの多種多様なコミュニケーションを通じて人類は文明化を進め，それとともに暴力的または不合理な行動に訴える可能性が少なくなっていくとみなす政治思想である[23]．この考えはモンテスキューに由来する[24]．彼は『法の精神』で *Doux commerce* という言葉については言及しないもの，商業利益に関わる社会的関係がもたらす徳について論じた．そして商業による社会交流が節度，協力，平和などを生み出すと主張した[25]．その結果，彼は商業に携わる人々の社会的影響を通じて，社会は次第に暴力的，破壊的な行動を起こしにくくなると主張した．

穏和な商業論について論じたモンテスキューの影には，サロンの女主人の存在があった．モンテスキュー自身もタンサン夫人やジョフラン夫人のサロンに通い彼女たちの会話を通じて自分の政治思想を洗練化させることができた．彼は会話という社会および知的交流を通じて思考も深まっていくことを身を持って実感した．この点について A.O.ハーシュマンは以下のように説明している．「*doux* という形容詞は多分非商業的な社会交流に起因するだろう．貿易を除いてこの言葉は長いこと活気のある繰り返される会話やそれ以外の礼儀正しい社会交流のあり方を指した[26]．」ハーシュマンはしばしばこの社会交流に異性の男女の関係性が含まれていたことも指摘した[27]．

その後穏和な商業論は著名なスコットランド

の啓蒙哲学者であるA.スミスやD.ヒュームに引き継がれた．政治エッセーの「通商について」でヒュームは貿易が国家間の平和的関係に貢献する一方で，個人レベルにおける社会交流が節度や尊重を生み出し，正直さ，公正さ，寛容さを形成させることを指摘した[28]．一方モンテスキュー同様にパリのサロン社会に精通していたヒュームは，文明の推進者としてサロンの女主人の会話の技巧を称え，それが節度としてフランス王政の臣民の社会的紐帯を維持する心理的ベースであると指摘した[29]．

ヒュームはサロンの女主人の会話の技巧が社会に節度をもたらすというメリットを強調すると同時に，商業を含む社会交流を通じて形成される「正直さ，公正さ，寛容さ」に支えられたヒューマニズムを称賛したが，これらの価値観は自然法に近いものがある．自然法とは人間性や合理性に根付く人間の行動を支配する普遍的な道徳的原則を指す．穏和な商業論と自然法は異なる思想体系であるが，同時に両者には社会的徳の発展および社会的協力や相互の恩恵などを重視する点で共通点を持った．しかしながら女性性が生み出す社会的恩恵というテーマにおいて，自然法はサロンの女主人が会話の技巧により醸し出す節度を讃える穏和な商業論とは異なる視点から，家庭内における女性の社会的恩恵について論じた．

人間の社交性について自然法の立場から論じた S.V.プーフェンドルフは結婚が「人類の保育所」であると定義づけ，家庭内で，本質的にエゴイストな男性たちはより社交性に富んだ女性の倫理的影響のもとで人間として文明化されていくと考えた．また彼は唯物論的視点から，社交の第一歩は男女間の性交から始まると説いた[30]．ブルラマキも家庭内において「男性の最も困難で非社交的な考えは女性の影響によって柔和化され，人間的になり，統制されやすくなる」と指摘した[31]．これらの自然法学者にとって，結婚の目的は単に子供を産み育てることではなく「男性の道徳的な改良」と言う意味も込められていた[32]．同時に，プーフェンドルフやブルラマキらの自然法学者の女性論により男女の性差についての認識は逆に強まり，女性と家庭を結びつける直接的契機となった[33]．

自然法の影響のもと，フランスの神学者で作家の F.フェヌロンは，良妻賢母として女性は家庭における子供たちの「教育者」であり，女性にも教育が必要であると説いた[34]．さらに自然法は感覚主義的哲学を重視するフランス啓蒙哲学の代表的フィロゾフであるC.-A.エルヴェシウスにも影響を及ぼした．彼は幸福の要素として性愛を認めたが，この視点から家庭的な女性を男性の欲望の対象として崇めた．彼の女性観は革命期に愛国派として知られることになる弟子たちに伝授された．彼らは男女の肉体的な関係が個人の幸福の追求において不可欠な政治テーマであることを認めた[35]．

このように，サロンの女性や良妻賢母を含む女性のあり方は啓蒙哲学における進歩主義の一端を担った．しかし十八世紀後半になると，フランスではサロンの女主人に対する批判が高まっていった．その理由は，外の活動にかまけて家の中のことを顧みない彼女たちが人口減少や国力衰退を引き起こしたと批判する論者が登場したからである．フランス王政のエリートは統計がないにもかかわらず人口減に怯えた．例えば，ヨーロッパ諸国が十パーセントの人口増加を維持したのに対してフランスのそれは三パーセントにすぎなかった，との記録が残っている[36]．国家財政の悪化や政治の行き詰まりなどの深刻な問題と相まって，人口問題は十八世紀後半のフランスの社会機運に影響を及ぼした．その結果，男性論者は国家衰退の最大の象徴として，育児，子育てなどの家庭的な領域に関心を示さず，宮廷人事の後方支援，サロンなどの知的活動，性的放縦性などに明け暮れた上層階級の女性への批判を強めた[37]．そしてこの思想的流れに決定的な影響を及ぼしたのが J.-J.ルソーの共和主義的母性論である．

(3) ルソーによる共和主義的母性言説の刷新[38]

ルソーの女性観の出発点には穏和な商業論に対する敵愾心があった．彼は自然法学者が論じた人の自然ないし人為的な社交性の可能性についても疑問を呈した．『学問芸術論』（一七四九-五十）や『人間不平等起源論』（一七五三-五四）は，自然状態において，他者から孤立し自給自足的な生活を送る人間が本質的に善の存在であるとした[39]．彼は自然状態に置かれた人間を称賛す

る一方で，十八世紀のフランス王政が象徴する文明社会が人間を悪に向かわせる源であると批判した．しかしながら彼は単にユートピア的な自然状態への回帰を訴えるのではなく，十八世紀フランスよりも優れた社会形態の可能性もあると考え，人間の完全性という進歩主義を否定しなかった[40]．彼の『社会契約論』(一七六二)は公正な社会を想定し，教育に関する著作『エミール』(一七六二)とともに，文明社会に生きる人類の道徳的再生が可能であると示唆した[41]．

ルソーは彼の一連の社会改造計画の中心に女性を据えた．『エミール，または教育について』の第五編は，エミールの理想的な配偶者となるためのソフィーの教育について論じた．ルソーは生殖をジェンダーの根本要素とみなして「男女の結合において，両者は等しく共通の目標に貢献するが，その方法は同じではない」こと[42]，「性に関係のない点に関して女性は男性と同じだが，性に関係のある点に関して両性は異なる」と指摘した[43]．このようにルソーはジェンダーを定義づけるにあたって両性の生物的差異から男女の道徳的差異を導きだした．彼はセクシュアリティーの類推から，男性は「能動的で強く」女性は「受動的で弱くなければならない」と論じた．さらに，女性が社会で生物としての女性性を全うするためには何としてでも「男性(エミール)に気に入られる」術をもたねばならないとした[44]．これらのソフィーについての考えによりルソーは物理的性差をジェンダーに適合した思想家となった．

ルソーの『演劇：ダランベール氏への手紙』(一七五八)も『エミール』同様に差異派フェミニズムの視点から書かれている．しかしながらフランス王政を前提に書かれた『エミール』とは異なり，『演劇』は共和主義の視点からジェネーヴ共和国の女性市民の政治および男性市民に対する倫理的な影響について論じた点が異なった．

『演劇』は『百科全書』第七巻（一七五七）にダランベールが投稿した論文「ジェネーヴ」への反論である[45]．ダランベールは「観劇にはより良い振る舞いを伝授する」教育効果があるとしてこれを推奨した．そして女子教育の一環としてジェネーヴ共和国に劇場を建設することを奨励した[46]．これに対して，ルソーはダランベールが主張する演劇の教育効果を否定した．ルソーによれば，人がなぜ劇場へ行くかと言えば，それは何かを学ぶためではなく，自身が持っている感情を擬似体験するという娯楽のためだった．さらにジェネーヴに劇場を建設すると言う計画についても，共和国の社会風習を汚すものとしてこの計画に反対した[47]．

女性の観劇が社会に悪影響を及ぼすことを正当化するために，ルソーはジェネーヴ共和国とフランス王政という地理・国家間の対比のみでなく，現在と過去という対比も持ち出した．そして観劇を楽しむ古代ローマの上層階級の貴婦人が家庭を怠り関心を外に向けたことがローマ帝国の崩壊の引き金となったと説明づけた[48]．彼は現在に目を移し「状況は十八世紀フランスでも同じである」と指摘した．そしてフランスではパブリックな場で両性が混合することにより女性の男性に対する社会的影響力が強まり，男性が政治的責任を果たすのに相応しくない弱い存在になってしまったと結論づけた[49]．

ルソーは観劇を楽しむフランス王政の上層階級の貴婦人を批判したが，それは穏和な商業論に内在する女性像の批判と連動した[50]．彼はサロンの女主人が男性にさまざまな影響を及ぼすことにより男性を本来の政治的役割から遠ざけて弱体化させてしまうことを恐れたが，その影響の一つが女性の男性への審美的な影響だった．この点で彼のサロン批判は，十七世紀以来フランスの上層階級を文化的に支配した「礼儀や温厚さに関するイデオロギー（honnêté)」に対する批判とリンクする．このイデオロギーは，十八世紀までに「世俗的な会話，異なるジャンルの文学，フランス語への愛，そして友情への献身などを並行して培うという目的の元，男女の間に共通の文化を持つことをよしとするイデオロギー」へと発展した[51]．

「礼儀や温厚さに関するイデオロギー」はパリの貴婦人の洗練された嗜好を高く評価し，彼女たちが音楽，文学などを含む芸術の選定に当たって規範的な役割を演じることを奨励した．ヴォルテールは悲劇『ザイール』の導入部で「フランス社会は男女間の絶え間ない社交が，非常に活発で礼儀正しく，他ではまったく知られていない礼儀を生み出した．フランス社会は女性の存在にかかっている[52]」と書き，フランス文化，社交性，女性の間の相互関係性を讃えた．そ

してこれらの価値観が観劇を通じてさらに社会的な好影響を与えることを期待した．女性の観劇に関するダランベールの主張はこのイデオロギーの延長線上にあった．

ルソーはジェンダーを生物学的な視点から定義づけたが，これは穏和な商業論や自然法に内在した社会的な視点に立つ女性性の定義を否定したことを意味する[53]．彼によれば女性の徳とは一部のエリート女性が持つ際立った感性や嗜好を指すのではなく，良妻賢母たる女性の「慎みと羞恥心」を指しそれは第一に性的慎みを意味した[54]．ルソーは家庭的な女性こそ「誠実な女性」(femmes honnêtes)であると解釈し，穏和な商業論と密接に結びつく *honnêtes* の意味を「礼儀や温厚さ」ではなく「誠実さ」にすり替えた[55]．

『演劇』は良妻賢母像を讃えて女性市民の観劇の可能性すら否定したが，「ソフィー」と比べた時それは相対的にはより活動的な女性市民像だった[56]．『演劇』はフランス王政とジェネーヴ共和国が異なる政治文化を持つこと，そしてジェネーヴ共和国の政治的安定がジェンダーに基づく公私の領域の棲み分けに基づくことを指摘した．そして彼は共和国の政治的安定が良妻賢母としての女性市民が形成する社会風習に依存すると指摘した[57]．ルソーによれば，男性市民による政治参加を主体とする民主主義は性的に慎み深い女性市民が形成する「純粋な社会風習」という道義的規範を必要とした．このルソーの考えをフェミニスト的とみなすことはできない．しかし「ソフィー論」と比べた時，『演劇』が共和国の女性市民に対して一定の政治的役割を認めたとは言える．

ルソーにとってジェネーヴ共和国の女性市民の模範となったのが「独立心に飛んだ勇気ある」古代スパルタの女性だった[58]．プルタルコスの『スパルタ女性たちの名言集』『女性たちの勇敢』『リクルガスの生涯』などの女性に関するエッセーは著名な翻訳家によって現代語訳（フランス語）されており，その生き生きとした表現は十八世紀後半の多くのフランス人読者を魅了した．ルソーもプルタルコスの愛読者として，この古代ローマを代表する歴史家から古代スパルタの女性市民についての知識を得たものと思われる[59]．

プルタルコスによれば，アテネの民主主義においては全ての女性が男性の支配下に置かれたが，スパルタの女性はより自由だった．男女それぞれに社会階層が存在し，女性の一部は貴族階層に属することができた．彼女たちは未婚の間は性的にも相対的に自由だった．彼女たちは法律を愛し，また法律を愛することの重要性についても理解していた．彼女たちは柔和な性格ではなかったが，妻母として，夫を統制し息子を愛国心にあふれた市民に教育する術を心得ていた．さらに結婚後一部の富裕な女性は一定の自由を持つことが許された．彼女たちは持参金と相続を通じて土地を所有することができ自分の財産を管理することもできた．実際スパルタの女性はスパルタ全体の五分の二の土地を所有し，それを耕す農奴と奴隷も持っていた．スパルタでは裕福な女性は市民になることができた[60]．さらにプルタルコスによればスパルタの女性は何よりも勇気ある戦闘家であり「ある女性は，息子に自分の盾を手渡すと，これを持って，あるいはこれに乗って帰ってくるよう言い渡した」とのエピソードを伝えている[61]．

以上により，ルソーは古代ヨーロッパの共和主義的母性言説に女性性に関する二つの新たな論点を加えこの言説を近代化させた．第一に『エミール』は，近代社会における公私の性的役割分担に対して決定的な影響を及ぼした．そこには教育格差を通じて男女の力関係が明確に規定され，まさしく近代が男尊女卑の時代と形容される根拠となった．第二に，ルソーは，ジェネーヴ共和国やフランス王政の女性に向けて「華やかさ，豪華さ，わざとらしさ」のない「愛国心に満ち溢れた」古代スパルタの女性市民の魅力を発信した．民主的な共和国憲法を維持するために，彼女たちが健全な社会風習の守り神であることを強調し，共和国の女性市民が家庭内で性的な意味において夫の道義モデルとなることにより共和国の健全な社会風習に対して目に見えない政治的役割を担った．男性市民の愛国心を鼓舞すること，それは家庭内で全面的に受け身な良妻賢母となることを期待されたソフィーとは異なる，相対的にはより積極的な共和国の女性市民像である．そしてルソーの主張はスイスのみならずフランスの女性たちを持って，古代スパルタをイメージした共和国の女性市民の能動的な政治的役割に目覚めさせた[62]．

次節では，ルソーが時代に合わせて刷新した

共和主義的母性言説がウルストンクラフトのフェミニズム論に対して及ぼした影響について考察する．

(4) 共和主義的母性言説のフランス革命期のフェミニズム論への影響：ウルストンクラフト

ルソーにとっては皮肉な結果と言えるが，フランス革命期に彼の「教え」に耳を傾けたのは最も教育程度の高い女性たちだった．その一人がフランス革命期を代表するフェミニスト論者のウルストンクラフトである．彼女は「ルソーの推論の誤りはすべて感性から生じたものであり，彼は女性にとって魅力的な感性に対して敏感だ」[63]「私はルソーに敬意を表するために娘に帯を買おうと思う．私はいつだって半分ルソーに恋をしているのだから」などと書き残している[64]．これらの言葉から，彼女のルソーの受け取り方にはプラスとマイナスの側面があったことが理解される．そしてルソーに対するプラスとマイナスの観点を『女性の権利の擁護』からも読み取ることができる[65]．

実際フランス革命を主導したイデオローグとして認められていたルソーがウルストンクラフトの作品の中心的存在だったことはこの著作が出版されたタイミングからも正当化できる[66]．彼女は一七九一年十月から一七九二年一月までの三ヶ月に『女性の権利の擁護』を書いた．この時期はフランスでは立憲君主政下のもと一七九一年憲法が施行された最初の三ヶ月に呼応する．つまりそれはフランスでもイギリスでも，フランス革命に対する人々の楽観的な期待が高まりつつあった時期だった．

ウルストンクラフトは，革命フランスの立憲君主派の政治家 P.タレーランによる「公教育に関する報告』と題する女子教育論に反論するために『女性の権利の擁護』を書いた．彼の報告書によれば，女児は八歳で学校を修了し，それ以後「幼少期が終わるまで，彼女は家の中で母親のもとに過ごすべき」とされた．このような女性像の背後には「すべての女性はその活動を私的領域に限定された仮想の母親である」との前提があった[67]．彼の女子教育観には女性＝母親という生物的な前提を重視したルソーの強い影響があった．

ウルストンクラフトはタレーランの，実質的には女子に対していかなる教育も施す必要はないとの考えに強く反発した．そしてタレーランに反論するということはルソーの否定も意味した．正確には，それは四節で取り上げたルソーの女性性に関する第一の論点である，良妻賢母になることを運命づけられた女性に教育は必要ないとみなすルソーの女子教育論の拒絶につながった．彼女は男女が同じ教育を受けることにより家庭内でより対等で良好な関係性を維持できるとの立場から『女性の権利の擁護』の主旨を次のように要約した．

> 「私の主要な議論はこの簡潔な原則に基づいている．すなわち，もし女性が教育によって男性の同伴者となるよう準備されていなければ，彼女は知識の進歩を止めてしまうこととなる．なぜなら，真理は万人に共通でなければならず，そうでなければ，一般的な実践に影響を与えるという点で，その真理は効力を持たないからである．また，なぜ自分が高潔でなければならないかを知らないと言うなら，どうして女性に協力を期待することができようか」[68]．

ウルストンクラフトは，フランス革命以前からロンドンで急進派のリチャード・プライス率いる政治サークルに出入りし，ルソーの著作やルソーの著作に関する評論に精通していた[69]．プライスは革命前夜から革命期にかけて，穏健派の共和派として知られるコンドルセらと交友関係を持ち，フランス革命に賛同した．ウルストンクラフトも後にジロンド派と呼ばれる穏和な共和派に賛同していることから，彼女がタレーランらを含む立憲君主派以上の社会変革を思い描いていたことは想像に難くない．

家庭内における男女間の教育格差を否定すべく，ウルストンクラフトはまず男女の違いではなく共通点に目を向ける．つまり男女は共に性的な存在であると同時に「理性の性質は万人に共通でなければならない」[70]．ウルストンクラフトは人間としての視点から両性の理性の平等を論じた．彼女にとって，いかにルソーがソフィーの「魅力的な性格」を強調しようと，それはあくまでも男

性目線による見方であり，彼女の目から見た時ソフィーの性格は「不自然なもの」に映った[71]．ウルストンクラフトはセクシュアリティーの視点からルソーが女性を「表面的で，本来的に弱い性」と決めつけたと指摘し，この理由により女性を政治領域から排除したことを批判した[72]．彼女は，常に男性を喜ばせようとするなど社会が強制する歪んだ不自然な性格から女性を解き放つために，女性も男性と同等の教育を受けるべきであると主張した．

ウルストンクラフトは，理性を培う教育が男性のエミールだけのものであるとするルソーの立場を否定し，女性が教育を受けて精神的に自立することの重要性について次のように強調した．

> 「女性を男性のように教育する．これこそ私が目指しているところだ．私は，女性が男性に対して力を持つことを望んでいるのではなく，女性自身に対して力を持つことを望んでいる」[73]．

ウルストンクラフトは，女性も男性と同等の教育を受けることにより，外見ではなく「能力や徳」を磨くことができ，その結果人から称賛や尊敬を受けることができると考えた[74]．そして男女が同等の教育を受けて同等に政治に参加すれば，両性は相互に刺激を与え合い，さらに相互の「能力や徳」を向上させることができると考えた[75]．その結果，理性における男女平等を訴えたウルストンクラフトは「近代社会に根ざす女性蔑視の代表的思想を批判した」フェミニストとしての地位を不動のものとした[76]．

しかしながらウルストンクラフトのルソーとの関係性は反論のみではなかった．彼女は女性が男性と同等の教育を受けることの大切さを指摘すると同時に，男女の肉体的性差およびそれに伴って両性が異なる社会的役割を担うことについては肯定的に受け止めていた[77]．彼女は初版で「男性は追い求め，女性は屈する」と『エミール』を思い起こさせる考えを記している[78]．これはルソー同様，ウルストンクラフトにとっても生物としての女性に与えられた運命が第一に母親だったことをうかがわせる[79]．さらに彼女にとって女子教育の究極的な目的も，できるだけ良い母親になることだった．

> 「この子供たちの世話をするという義務は，適切に考慮されれば，女性の理解を深めるための説得力のある多くの議論を生み出すだろう・・・良い母親になるために，女性は知性と，夫に全面的に依存することを教えられた女性にはほとんど備わっていない精神的な自立心を持たねばならない」[80]．

ウルストンクラフトが共和主義的母性言説に賛同したことを指摘したが，それは彼女がルソー同様に穏和な商業論に込められた「フランス人女性」に敵対した点からも確認することができる．ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』に書いた「フランス人女性」は実体験に基づいたものではない．なぜなら彼女がフランスに赴いたのは一七九二年以後のことだったからである．彼女の「フランス女性」像は当時のイギリスに流布していたステレオタイプ的イメージを受け継いだものであり，そこには彼女の愛読書であるルソーの作品の影響や当時のイギリス社会におけるフランス女性に関する一般通念の影響があった．当時のイギリスに伝播していた穏和な商業論や政治的人文主義の思想的影響もあっただろう．

『女性の権利の擁護』が革命フランスの女子教育政策に対する反論だったことを指摘したが，この作品をイギリス社会の文脈に置いた時作品は別の顔を持った．彼女は自国の「『怠惰』な貴族女性と，その模倣に明け暮れる一部の中流階級女性」を批判した[81]．ウルストンクラフトは，彼女たちが十分な教育を受けていないために生涯男性に従属して生きていかなければならなかったことを一貫して批判的に論じた．

ウルストンクラフトのイギリス女性とフランス女性の見方は異なる．彼女はフランス女性については階級差を意識していない．なぜならより現実的なイギリス女性論と比べて，彼女のフランス女性論は，穏和な商業論における女性の表象像としてのサロンの女主人が基軸となっているからである．例えば彼女は「フランス人女性」は「家庭内の清潔さと繊細さを軽蔑する」などと書き，暗に「フランス人女性」が良妻賢母の資質に欠けていることを指摘する[82]．つまり彼女に

とってルソー同様「フランス女性」とは共和主義的母性言説に対立する存在だった．

ウルストンクラフトはフランス人女性が性的な「謙虚さ」に欠けると指摘する[83]．それはルソーによるフランスの貴婦人の性的放縦さに対する批判及び彼が共和主義的母性言説において強調した貞操という意味の「謙虚さ」の否定と一致する．また彼女は「礼儀作法」という言葉を使うが，この言葉も十八世紀後半のパリのサロン社会を特徴づける概念であり，パリのサロン社会をリードするフランスの貴婦人像を想起させるものである[84]．

> 「フランスでは，官能の真髄が性欲をそそるために抽出され，一種の感傷的な欲望が蔓延し，政治と民政の全体的な風潮が教える二枚舌のシステムと相まって，フランス人の性格に不吉な種類の賢さ，正しくは「精巧さ」(finesse) と呼ばれるもの，そして社会から誠実さを追い出すことによって本質を傷つける礼儀作法の洗練を与えてきた．また，美徳の最も美しい宝である謙虚さは，フランスではイギリスよりもひどく侮辱されている」[85]．

さらに「フランス人女性」について語る時，ウルストンクラフトが知識の伝播および両性の社交をその特徴とみなすパリのサロン社会を念頭に置いたことは，以下の引用から確認できる．「フランスではヨーロッパ世界の外のどこよりも一般的な知識が伝播しており」それは「長い時間をかけて両性の間で交わされた社交に起因する」[86]．この点はイギリスとフランスの上層階級の女性の最も大きな違いである．女性に教育を施すことの重要性を指摘するウルストンクラフトは，サロンの女主人の高い教養がもたらす徳については否定しなかった．彼女は「男性は三十歳を過ぎて十全たる成長と強さを会得するが女性は二十歳で成熟するとみなすイギリスの社会通念を否定し，女性も人として完成するまでには三十歳まで待たなければならない」と指摘する[87]．そして別の箇所で「美の概念に知性を含めるフランス人は三十歳以上の女性を好む傾向にある」として女性の知性を認めるフランス人の態度を肯定した[88]．

しかし最終的にウルストンクラフトは穏和な商業文明の道義的弊害を持ってサロンの女主人を糾弾する．彼女は「フランス女性」と特定化せずに商業文明がもたらす未来社会でセクシュアリティーの視点から女性がかつての富裕な男性の世襲貴族と同等の存在に成り下がるリスクについて指摘した[89]．ウルストンクラフトは彼女たちが「偽りの洗練，不道徳，虚栄の種を撒き散らす」となることを憂いている[90]．彼女たちはかつての男性の世襲貴族同様に「努力をせず外見により肉体的快楽を得ることができるゆえ」「精神的に疲弊させる悪徳の影響を受けやすかった」[91]．

ウルストンクラフトは，商業文明下で女性たちが仕事や人生から排除され，暇と富にかまけて極端に女性化されてしまう危険があると指摘する[92]．彼女がこのように書く時彼女が想定する女性像はサロンの女主人である．なぜならウルストンクラフトによれば，サロンの女主人とは単にフランスの上層階級を占める少数の恵まれた女性を意味するのではなく，商業文明社会における全ての社会階層の女性を象徴する普遍的な規範だったからである．

> 「工業化し消費する文明の影響下のもと，すべての階層の女性たちは，世襲制度の偉人たちが以前に流布していた誤った洗練，不道徳，虚栄の種を永続化させ，伝播させることが求められる」[93]

その結果，ウルストンクラフトは，商業文明社会においてすべての女性たちが形骸化された家族関係の中で身動きの取れない状態に陥るリスクを危惧した[94]．彼女はルソー同様に，女性の社交性を讃える商業文明が女性に道義的空虚さをもたらすことを憂いていた．彼女は自分が否定する女性像の対極に共和主義的母性言説を位置付けた．ウルストンクラフトにとって女性は母乳育児，子供の密接な監督，看護婦や家庭教師に代わる養育，社会化，教育を担うべき存在だった．彼女はセクシュアリティーに溺れやすい女性たちに教育を通じて理性を植え付けてある程度男性化させることにより，彼女たちが社会的責任の伴う良妻賢母になるべきと提案した．

ウルストンクラフトが共和主義的母性言説に強く感化されたことを示したが，この点で彼女のキーワードは「謙虚さ」である[95]．ルソーにとって謙虚さとは自分の性をわきまえて家庭内にとどまる女性を指した．ウルストンクラフトは，謙虚さを持ち合わせた母親は，文化，会話などとともにセクシュアリティーですら外に向けられた「フランス人女性」という最悪の社会モデルから逃れて，女性の自然な姿である家庭へ戻っていくと考えた．つまりウルストンクラフトは理性における両性の平等を唱えたに違いないが，同時にそれは穏和な商業論に反発し，共和主義的母性言説に込められた生物的差異に基づく女性性の考え方を受け入れることを意味した．その結果，男性化された女性がその理性や徳を発揮できる主要領域は私的領域である家庭（および投票）だった．つまり彼女にとっての女性教育とは夫婦間の尊重，友情，ある種の愛情に裏付けられた関係性に基づく家庭を作るための手段だった．

ウルストンクラフトは「女性を過度の女性化に追い込む」ことを避け「女性の男性化」を進めるために，限定的な理性の発揮に加えてもう一つ別の手段を提案した．それはルソーの女性性の二つ目の論点である古代ギリシャの女性市民像を見習うことである．彼女は原則としてルソーの政治思想を特徴づける「男女の相互補完論」に強く反発し，女性を男性に近づける，すなわち女性の男性化を提唱した[96]．それと同時に彼女はルソーの肉体的差異に由来するジェンダーの概念を肯定している．彼女がプルタルコスを読んだという証拠はない．それにもかかわらず『女性の権利の擁護』も古代スパルタ共和国の女性の「性的な慎み深さ」を通じた社会風習への貢献を肯定している．そして母親たちが「愛国心と公徳心に満ちた市民」を育てると言う政治的義務に目覚めることを期待した．

> 「フランス人女性がほとんど軽蔑している家庭生活における個人的な控えめさ，清潔さと繊細さに対する神聖な敬意は，慎み深さの優雅な柱である．しかしもし愛国心の純粋な炎が彼女たちの胸に届くのであれば，彼女たちを軽蔑するどころか，女性の慎み深さを尊重するだけでなく，彼女たちの尊敬を受ける唯一の方法として，自らもそれを身につけるよう男性に教えることによって，同胞市民の道徳を向上させるために努力すべきである（下線は筆者による）」[97]．

ウルストンクラフトは知性のみならず，女性も体力を鍛えることにより道義性を高めることができると考えた．つまり彼女はルソー同様政治的人文主義の影響を受け，強い肉体が強い徳を生み出すこと，それゆえ強い肉体を持つ男性は女性よりも精神性が高いとする考え方に賛同した[98]．このような考え方はルソーの主張および当時のイギリスの社会通念に従ったものであり，それはスパルタを含む古代ギリシャの女性像とも重複した[99]．それと同時に彼女は男女の肉体差を本質的なものと考えることを拒絶し，程度の差，環境の差として捉えた[100]．そして女性も若い頃からスポーツをすることによってより強い体を鍛えることにより高い精神性を得ることができると考えた．この点から彼女は「女性は，男性よりも肉体の力が劣ることを理由に，弱く受動的であるべきであると論証しようとする」ルソーの論点を問題視した[101]．

ウルストンクラフトにとっての理想的な女性市民像とは，ルソーが描いた良妻賢母像を理性で補足し，かつ共和主義に対して強い道義的コミットメントを持っていた．彼女にとって生物的な女性性に根ざした倫理的自由とは，高い徳に根ざしていたに違いないが，同時に，それは政治的人文主義の影響の下，自由というよりも義務に近い感覚だった．それゆえ彼女は投票以外の女性の社会，政治活動に対しては後ろ向きだった．例えば革命派の女性たちが政治クラブや戸外で非公式な形で政治に関与し，上層階級の女性が自宅でサロンを開くなどの政治活動に眉をひそめた．さらに彼女は経済的自立についてもそれを認めはしたもののそれに対して積極的ではなかった．

折衷主義的なウルストンクラフトのフェミニズムにおいて，究極的には共和主義的母性言説は女性の理性に勝る．なぜなら彼女は第一に女性を妻，母として家庭に結びつけ，それを彼女たちの政治参加の根拠とみなしたからである．「偽

りの洗練，不道徳，虚栄の種」，「弱く，人為的」な「フランス人女性」に対して，良妻賢母としてのイギリスの中産階級の女性の在り方こそ彼女にとって女性の自然な状態だった．

> 「私は中流階級の人々に特に注意を払っている．彼らは最も自然な状態にあるように見えるからだ．偽りの洗練，不道徳，虚栄の種は，おそらく偉大な人々によって撒かれたのだろう．弱く，人為的な存在が，その種族の一般的な欲求や愛情よりも上に持ち上げられ，永久に不自然なやり方で，美徳の根底を崩し，社会の大勢全体に腐敗を広げている」[102]．

ウルストンクラフトはルソー同様に穏和な商業論およびそれが象徴するサロンの女主人像を否定した．そして彼女はルソーの刷新した共和主義的母性言説から独自なフェミニズム論を発展させた．彼女は理性により男性化された良妻賢母像に加えて，女性市民の道義心及び貞淑さが共和国の愛国心の精神的源となることを認めた．そしてこれらの倫理的根拠により女性の政治参加を正当化した．そして彼女が理想とする共和主義的母性に特徴づけられた女性市民に最も近いのはイギリスの中産階級の女性だった．

結論：女性性の倫理的自由の観点から見たウルストンクラフトのフェミニズム論

本論文はフランス革命期のフェミニズムに多大な影響を及ぼした女性性の倫理的自由の視点から，ウルストンクラフトのフェミニズム論を分析した．

ルソーは，女性を社会的視点から定義づけサロンの女主人の会話の技巧を含む感性が社会に対して道徳的な好影響を及ぼすとみなす穏和な商業論を拒絶した．このイデオロギーを反面教師として，彼は女性性に関する二つの新たな論点をもって既存の共和主義的母性言説を刷新させた．第一にルソーは，女性のジェンダーをその生物的役割から類推し「弱く受け身な存在」と規定し，女性とは生来的に良妻賢母であり教育を施す必要がないと考えた．第二に古代スパルタの自由な女性像をもとに，共和国の女性市民は愛国心や道義的純粋性によって男性市民を政治活動に鼓舞するという政治的役割について肯定的に論じた．第一の点はフランス革命期の教育政策に直接的な影響を及ぼし，第二の点はフランス革命期に議会の外で繰り広げられたフランス人女性の政治行動を後押しした．

ウルストンクラフトは，これら二つの相矛盾するルソーの女性観にプラス・マイナスの形で反応した．そして彼女も穏和な商業論に反発しつつ，共和主義的母性言説の枠組みの中で自身のフェミニズム論を形成させた．第一の論点について，彼女は教育における男女の平等を重視して理性的な女性こそ賢明な良妻賢母であると主張してルソーの「男性を喜ばせることばかり考えている人為的で操作的なソフィー論」を論破した．第二の論点に関して，ウルストンクラフトはルソーとともに穏和な商業論に込められた外向きの「フランス女性」を否定し，生物的に規定された女性性の本分が家庭にあるとする共和主義的母性言説に賛同した．さらに彼女は古代スパルタの女性の勇気や愛国心，性的慎み深さ，そして体力的な強さを共和国の社会風習の源として称賛した．

最後に，以上に分析したウルストンクラフトのフェミニズム論について女性性の倫理的自由の視点から整理したい．先行研究はウルストンクラフトのフェミニズム論をイギリスの文脈に由来するリベラル・フェミニズムに位置付ける[100]．リベラル・フェミニズムとは個人の自由と権利を重視し，法的な平等を通じて性別の差別を解消しようとする古典的自由主義に由来するフェミニズムの潮流である．これに対して，英仏のフェミニズムの違いについて強く意識するK・オフェンはイギリスの「個人主義的」フェミニズムに対して，フランスのフェミニズムを「関係性のフェミニズム」と定義づけた．関係性のフェミニズムとは「男女のジェンダーの差を強調し，両者の相互補完性を強調することにより個人ではなく社会的要求を求めていくフェミニズムを指す[103]．本論文はウルストンクラフトのフェミニズム論には個人主義的側面と関係性の側面が共存することを指摘した．

本論文は穏和な商業論に込められた女性性の倫理的自由を反面教師とみなしたという点で，

ウルストンクラフトのフェミニズム論をルソーの政治思想に引きつけて考察した．このような問題設定には，女性の政治的権利ではなく市民権をどうやって保障するか，との問題意識が込められていた．この問題意識は今日女性をめぐるもっとも重要な問題として中絶の問題が政治化していることに由来する．もちろんウルストンクラフトを含めてフランス革命期を生きた女性たちに中絶をするか否かの選択をする可能性などなかった．そのような時代的制約を考慮しつつ，私たちはフランス革命期のフェミニズムから女性自身が中絶を選択しうる倫理的自由の可能性を汲み取ることができるのだろうか，と言うのが本論文の根底にある問題意識である．

これに対して，生物的な視点から女性性を規定するウルストンクラフトのフェミニズムは女性自身の中絶に対する倫理的自由に対して寛大とは言えないのではないか，と言うのが本論文の結論である[104]．本論文は女性性に由来する倫理的自由の視点からこの問題について考察したが，このような問いに答えるためにはプロテスタント教徒としてのウルストンクラフトの信仰心についても問いただす必要があるだろう．一方第三節で簡略的に取り上げた穏和な商業論および自然法に根ざした社会的，文化的に構築された女性性の概念はフランス革命期に女性の社会的，文化的自由を重視するフェミニズムへとつながっていく．この哲学的潮流については別稿で論じていく．

注

[1] フランス革命期の女性については，ピーター・マクフィー『フランス革命史―自由か死か』永見瑞木，安藤裕介（訳），白水社，2022．高橋暁生「フランス革命からナポレオンへ」『新しく学ぶフランス史』平野千果子（編），ミネルヴァ書房，2011，98-102．クリスティーヌ・ル・ボゼック『女性たちのフランス革命』藤原翔太（訳）慶應義塾大学出版会，2022. Karen Offen, *The Women Question in France*, 1400-1870. Cambridge, Cambridge University Press, 2017. ‘Women in the French Revolution: From the Salons to the Streets’ June 14, 2020. https://blogs.loc.gov/international-collections/2020/07/women-in-the-french-revolution-from-the-salons-to-the-streets/ (accessed on September 12, 2023). フランス女性史全般については，フランソワーズ・テボー（北原零未訳）「フランスにおける女性史・ジェンダー史―新しいアプローチ，新しい対照，新しい問題―海外の新潮流」，『ジェンダー史学』9，2013，79-91．Christine Bard, Sylvie Chaperon, *Dictionnaire des féministes. France-XVIIIe-XXIe siècle*, Paris, Presses universitaires de France, 2017. 井上輝子，上野千鶴子，江原由美子，大沢真理，加納実紀代編『岩波女性学事典』岩波書店，2002．参考文献の記載がない場合，本論文中の英語，フランス語からの引用はすべて著者が翻訳した．

[2] 「公的領域，政治からの女性の排除は，私的領域すなわち『家内』における女性の役割の強調と表裏の関係にある．」高橋，「フランス革命」，99．

[3] 共和主義的母性言説については Jane Rendall, *Feminism and Republicanism: ‘Republican Motherhood’*; “The Republican Mother: Women and the Enlightenment-An American Perspective” (ed.) Linda Kerber in *American Quarterly*, Vol.28, No.2. *Special Issue: An American Enlightenment* (Summer, 1976) 187-205. Jean-Marie Roulin, “Mothers in Revolution: Political Representations of Maternity in Nineteenth-Century France”, *Yale French Studies*: *Fragments of Revolution*, No.101, 2001, 182-200.

[4] Jane Rendall, *The Origins of Modern Feminism: Women in Britain, France and the United States, 1780-1860*, Springler, 1985, 33-72.

[5] 「アメリカやフランスでは，十八世紀末までに，共和主義的な母性のレトリックがより積極的な意味を持つようになった．家庭領域はもはや，公的・社会的生活の単なる腰布ではなく，積極的な教育的・啓発的な機能を持つようになった．その結果，女性の立場はもはや，単に受動的なパートナーや家庭の実際的な組織者のみでなく，その性質は，適切な環境において，社会の精神を高揚させ，再生させることを可能にした」Rendall, *The Origins*, 32.

[6] トクヴィル，『アメリカのデモクラシー』第二巻（上）松本礼二（訳），岩波新書，2005，72-73．

[7] 本論文は政治的人文主義を含めたウルストンクラフトのフェミニズム論については梅垣氏の解釈を参考にした．梅垣千尋『女性の権利を擁護

する：メアリ・ウルストンクラフトの挑戦』白澤社・現代書館，2011．ウルストンクラフト研究として『フェミニズムの古典と現代―蘇るウルストンクラフト』アイリーン・J．ヨー（編）永井義雄・梅垣千尋（訳），現代思想新社，2002．フランシス・シャーウッド『紳士たちに挑んだ女―メアリー・ウルストンクラフトの障害』飯島宏（訳），新潮社，1995．クレア・トマリン『メアリ・ウルストンクラフトの生と死（1），（2）』小池和子（訳），勁草書房，1989．十返千鶴子『世紀末ロンドンを跳んだ女―メアリ・ウルストンクラフトを追う旅』，新潮社，1990．安達みち代『近代フェミニズムの誕生―メアリ・ウルストンクラフト』，世界思想社，2002．

[8] ウルストンクラフトの先行研究の動向については水田珠枝「現代フェミニズムにおけるウルストンクラフト論―『女性の権利の擁護』出版二百年を記念して」『思想』第八一八号（一九九二），100-117．

[9] 近世の女性史については Olwen Hufton,‘Women in History. Early Modern Europe’, *Past and Present*, No.101 (Nov.1983), 125-141.

[10] Natalie Zemon-Davis, *Society and Culture in early modern France*, Stanford, Stanford University Press, 1975, 126.

[11] フランスのサロンについては，赤木昭三，赤木富美子，『サロンの思想史―デカルトから啓蒙思想へ―』，名古屋大学出版，2003．Qntoine Litti, ‘The Kingdom of Politesse. Salons and the Republic of Letters in Eighteenth-Century Paris,’ *Republic of Letters*, Vol.1 (1), https://arcade.stanford.edu/rofl/kingdom-politesse-salons-and-republic-letters-eighteenth-century-paris (accessed September 12, 2023).

[12] Anderson,B.S., and Zinsser, J.P. *A History of their own:Women in Europe from Prehistory to the Present*, Vol.2, Oxford, Oxford University Press, 1990, 106.

[13] Carolyn Lougee, *Les paradis des Femmes: Women, Salons, and Social Stratification in Seventeenth-Century France*, Princeton, Princeton University Press, 1976, 170.

[14] Dena Goodman, *The Republic of Letters: A Cultural History of the French Enlightenment*, Ithaca, NY, Cornell University Press, 1994.

[15] Ibid.,5, 131.

[16] Daniel Gordon, *Citizens without Sovereignty: Equality and Sociability in French Thought,* 1670-1789, Princeton, Princeton University Press, 305-321.

[17] ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換：市民社会の一カテゴリーについての探求』，細谷貞雄，山田正行（訳），未来社，2010，49-53．

[18] Ibid.,48-49.

[19] Goodman, Republic, 238 から引用．

[20] Lee V., *The Reign of Women*, Cambridge, Cambridge University Press, 1975, 114.

[21] Ibid.,118.

[22] ボゼック,『女性たちのフランス革命』, 26-27.

[23] 穏和な商業論については Adam W.Saltzman, *Wealth and Peace: the History and Political Economy of Montesquieu's Doux Commerce*, Portland State University, MA thesis, 2022.

[24] Montesquieu, *Esprit des Lois*, XX-XXII.

[25] Ibid. VII-XVI.

[26] Albert O. Hirschman, *The Passions and the Interests: Political Arguments for Capitalism before Its Triumph*, Princeton, New Jersey, Princeton University Press, 1977, 62.

[27] Ibid.6.

[28] David Hume, “Of commerce”, *Essays Moral, Political, and Literary*. ed. Eugene F. Miller, Indianapolis, 1985, 93-104.

[29] ヒュームは，文学的才覚を身につけた貴族，上層ブルジョワ階級の女性によって開かれたサロンが「平和で優しく社交的で啓蒙化された近代文明の象徴である」ことを認めた．モンテスキューも，サロンを訪れる男性は自己主張が強く対立しがちだが，サロンの女主人たちが彼らの意見を公論という名の道義的コンセンサスにまとめあげた点について評価した．Hume, *Essays Moral,* 533-36.

[30] Helena Rosenblatt, “On the ‘Mysogyny’ of Jean-Jacques Rousseau: *The Letter to d'Alembert* in Historical Context.” City University of New York (UCNY) CUNY Academic Works. https://academicworks.cuny.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1245&context=gc_pubs (accessed September 12, 2023); *Rousseau and Geneva: From the First Discourse to the Social Contract,* 1749-1762, Cambridge University Press, 1997, 126-27,

133-34, 139, 155. Burlamaqui, “Lettre de M. Buramanqui sur le marriage, écrite à Mylord Kilmorey,” Burlamaqui, *les Principes du droit naturel et politique*, Geneva and Copenhague, C and A, Philibert, 1764, Vol.3, 290-291.

[31] Burlamaqui, “Lettre de M.Buramaqui,” 291.

[32] Jane Rendall, “Virtue and Commerce: Women in the Making of Adam Smith’s Political Economy” in (ed) Ellen Kennedy and Susan Mendus, *Women in Western Political Philosophy: Kant to Nietzsche*, New York, Palgrave-Macmillan, 1987.

[33] Fox-Genovese, Elizabeth, “Women and the Enlightenment,” Renate Bridenthal and others, *Becoming Visible: Women in European History,* Boston, Houghton Mifflin, 1987, 263. Rosenblatt “on the ‘Mysogyny.’”

[34] フェヌロン，『女子教育論』，世界教育学選集 11，明治図書，1960.

[35] エルヴェシウスを始めとする急進派のフランス啓蒙哲学者は，感覚主義的哲学の視点から，行政国家の強い社会的影響が臣民の徳に影響を及ぼすことができると考えた．彼らにとって美徳とは社会的な情熱を指し，その内容は社会とともに変化し，立法者はそれを評価し，臣民はすべての人に役立つ喜びを提供するよう導かれるべきであると考えた．また彼らは男女の社交性の物理的基軸を性交に置いた．Lucien Jaume, *l’Individu effacé: ou le paradoxe du libéralisme français*, Fayard, Paris, 1997, 30.

[36] Elizabeth Badinter, *L’amour en plus: Histoire de l’amour maternel (XVIII-XX),* 1980, Flammarion, 122.

[37] Ibid., 95-174.

[38] ここでは，言説＝複数の人が関わるもの，論＝一人の人が関わるもの，と区別する．

[39] Jean-Jacques Rousseau, *Les discours sur les arts et les sciences* ; *Discours sur l’origine et les fondements de l’inégalité parmi les hommes*.

[40] Michael Sonenscher, ‘Sociability, Perfectibility and the Intellectual Legacy of Jean-Jacques Rousseau,’ *History of European Ideas,* Vol.41, 2015. https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/01916599.2014.987563 (accessed March 1, 2025)

[41] Jean-Jacques Rousseau, *Du contrat social ou Principes du droit politique* ; *Emile ou de l’éducation*.

[42] ‘Dans l’union des sexes chacun concourt également à l’objet commun, mais non pas de la même manière. De cette diversité nait la première différence assignable entre les rapports moraux de l’un et de l’autre. ; il suffit que l’autre résiste peu.’ Rousseau, “Emile,” 693.

[43] Ibid. 693.

[44] ‘L’un doit être actif et fort, l’autre passif et faible ; il faut nécessairement que l’un veuille et puisse. ’Ibid.63. 三上「エミール」95.‘la femme est faite spécialement pour plaire à l’homme. ・・・Si la femme est faite pour plaire et pour être subjuguée, elle doit se rendre agréable à l’homme au lieu de le provoquer.’ Ibid.

[45] 『ダランベール氏への手紙』に込められたルソーの女性観については Rosenblatt, “on the ‘Mysogyny.’”

[46] 寺崎恵子,「ルソー『ダランベール氏への手紙』における instruction」『教育学研究』66(4), 1999，454-462.

[47] Ibid.455.

[48] ‘Quand le Patricien Manilius fut chasse du Sénat de Rome pour avoir donne un baiser à sa femme en présence de sa fille, à ne considérer cette action qu’en elle-même, qu’avoit-elle de répréhensible ? Rien sans doute : elle annonçoit même un sentiment louable. Mais les chastes feux de la mère en pouvoient inspirer d’impurs à la fille. C’etoit donc, d’une action fort honnête,faire un exemple de corruption. Voilà l’effet des amours permis du Théâtre.’ Jean-Jacques Rousseau, “Lettres à M.d’Alembert” in *Du Contrat Social ou Principes du droit politique*, Editions Garnier Frères, 1962, 163.

[49] ‘The Theory and Practice of *Honnêteté* in Jacques Du Bosc's *L'Honnête femme* (1632–36) and *Nouveau receuil de lettres des dames de ce temps* (1635)’, *Early Modern Europe*, https://earlymodernfrance.org/journal/2011-volume-xiii-2-production/theory-and-practice-honnetete-jacques-boscs-lhonnete-femme-163 (Accessed on November 26, 2023).

[50] Ibid.

[51] ‘La société dépend des femmes. Tous les peuples qui ont le malheur de les enfermer sont insociables. Voltaire, *Zaire:Tragédie en cinq actes*, Librarie

Hachette, Paris, 1884, 6.

[52] Ibid.6.

[53] ルソーによる生物学的視点から見た女性のジェンダーの定義については，三上「エミール」102-105.

[54] Colette Piau-Gillot, 'Le discours de Jean-Jacques Rousseau sur les femmes et sa réception critique' in *Dix-huitième siècle*: *Juifs et Judaisme*, No13, 1981, 319.

[55] 'Appliquons aux moeurs des femmes ce que j'ai dit ci-devant de l'honneur qu'on leur porte. Chez tous les anciens peuples policés elles vivaient très renfermées ; elles se montraient rarement en public, jamais avec des hommes ; elles ne se promenaient point avec eux, elles n'aaient point la meilleure place au spectacle, elles ne s'y mettaient point en montre.' Rousseau, "Lettres à d'Alembert," 194.

[56] Rosenblatt, "On the 'Mysogyny'".

[57] 'le pays, où les mœurs étaient les plus purs, était celui où l'on parlait le moins des femmes ; et que la femme la plus honnête était celle dont on parlait le moins.' "Lettres à d'Alembert,"160.

[58] Rosenblatt, "On the 'Mysogyny'". ルソーは『エミール』でもスパルタの女性を称賛した．Victor G. Wekler, "Made for Man's Delight : Rousseau as Antifeminist," *The American Historical Review,* April, 1976, Vol.81, No2, 273-274.

[59] 十八世紀半ばからフランス革命期までのフランスにおけるプルタルコスの人気については Robert Aulotte, *Amyot et Plutarque. La tradition des Moralia au XVI siècle*, Genève,Droz, 1965, 273. プルタルコスについては，瀬口昌久,「プルタルコスの指導者像と哲人統治の思想」シンポジウム『プルータルコスと指導者像』https://www.jstage.jst.go.jp/article/jclst/64/0/64_89/_pdf/-char/ja (accessed March 1, 2025) P.A.Stadter, *Plutarch and his Roman Readers,* Oxford, Oxford University Press, 2014,8.Aubrey de Sélincourt, "Introduction" Livy, *The Early History of Rome: Books I-V of the History of Rome from its Foundation,* Translated with an introduction by Audrey de Sélincourt, Harmondsworth, Penguin Books, 1960, 9.

[60] Sarah B. Pomeroy, *Goddesses, Whores, Wives, and Slaves:Women in Classical Antiquity*, New York, Schocken Books, 1975, 78. "Women and Ethnicity in Classical Greece: Changing the Paradigms," *A Companion to the Classical Greek World* (ed) Konrad H.Kinzl, Blackwell:Oxford, 361.

[61] プルタルコスによるモラリア二巻では，共和国における女性の政治的役割の典型例として，スパルタの貴婦人が母親として，息子が勇気ある戦士として死ぬことを喜び，そうでないことを嘆く数多くの言い伝えを掲載している．Plutarch, *Moralia*, Vol.2. https://markbwilson.com/courses/~readings/ag/ag52.pdf (accessed March 1, 2025)

[62] Le Corsu,F., *Plutarque et les Femmes,* Paris, 1981, 18.

[63] '(a)All Rousseau's errors in reasoning arose from sensibility, and sensibility to their charms women are very ready to forgive.' Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Women, with Strictures on Political and Moral Subjects, with a biographical sketch of the author*, New York, A.J.Matsell, 1833, 96.

[64] She contemplated buying their daughter a sash to "honour J.J.Rousseau…and why not?-for I have always been half in love with him." Mary Wollstonecraft, Letter XXIII [Paris] September 22 [1794] *The Love Letters of Mary Wollstonecraft to Gilbert Implay*. https://uw.manifoldapp.org/read/the-love-letters-of-mary-wollstonecraft-to-gilbert-imlay/section/2e4ce375-3931-4cc1-a243-854cce571486 (accessed March 1, 2025)

[65] 本論文と同じくウルストンクラフトの理性を折衷的な視点から捉えた研究として，ジョーン・W・スコット,「第三章：メアリの肯定，アリスの否定–フェミニズム理論が抱える女性理性のパラドクス」，アイリーン・J・ヨー著，永井義雄，梅垣千尋訳,『フェミニズムの古典と現代：甦るウルストンクラフト』，現代思湖新社，2002，79-98.

[66] ルソーとウルストンクラフトの政治思想の（部分的）親和性について論じた代表的な先行研究には以下がある．M.グリフィスはルソーとウルストンクラフトが技術やメソッドではなく包括的な教育の複雑さについて論じ，若い人々のための社会正義を目指したという点に部分的な共通点を見出した． Morwenna Griffths, "Educational

Relationships : Rousseau, Wollstonecraft and Social Justice" *Journal of Philosophy of Education*, Vol.48, No.2, 339-354. E.ハントはウルストンクラフトがバークとルソーから家父長制度を受け継いだが，ルソーの児童教育と母性の力，バークの家族を個人の社会化のための感情的ベースとみなす考えを引き継ぐことによって相互のメンバーにとって平等な家族関係を描いたと指摘した．Eileen M. Hunt, *Family feuds: Wollstonecraft, Burke, and Rousseau on the transformation of the family*, 2006. G.ダートはルソーの政治思想がロベピエールのスピーチや政治行動を介して英国の作家に実質的な影響を及ぼしたと指摘する．その結果，ウルストンクラフトや彼の夫のゴドウィン，ワーズワースらは恐怖政治後ジャコバン主義が残した伝統の視点からルソーについて考察した．Gregory Dart, *Rousseau Robespierre and English Romanticism,* Cambridge, Cambridge University Press, 1999. A.シュルマンはウルストンクラフトがバークとルソーの見方をもとに啓蒙主義的な「知性と感性」にアプローチしたと分析する．Alex Schulman, "Gothic Piles and Endless Forests: Wollstonecraft between Burke and Rousseau", *Eighteenth Century Studies*, Vol.41, No.1, Fall 2007, 41-54．これらの先行研究に対して，本論文は政治的人文主義をめぐる両者の共通点について探る．梅垣氏は政治的人文主義の視点からルソーとウルストンクラフトの共通点について指摘した．梅垣『女性の権利を擁護する』78-84.

[67] Talleyrand-Périgort Charles-Maurice de, 'Rapport sur l'instruction publique, fait au nom du Comité de Constitution à l'Assemblée nationale, les 10,11,et 19 Septembre,1789.' https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k49002n.image # (accessed March 1, 2025)

[68] 'my main argument is built on this simple principle, that if she be not prepared by education to become the companion of man, she will stop the progress of knowledge, for truth must be common to all, or it will be inefficacious with respect to its influence on general practice. And how can woman be expected to co-operate, unless she knows why she ought to be virtuous?' e, *The Vindication*, 2-3. 'Appliquons aux moeurs des femmes ce que j'ai dit ci-devant de l'honneur qu'on leur porte. Chez tous les anciens peuples policés elles vivaient très renfermées ; elles se montraient rarement en public, jamais avec des hommes ; elles ne se promenaient point avec eux, elles n'aient point la meilleure place au spectacle, elles ne s'y mettaient point en montre.' Rousseau, "Lettres à d'Alembert," 194.

[69] ウルストンクラフトとルソーの関係性については Laura Kirkley, 'Jean-Jacques Rousseau' ed. Nancy E.Johnson, Paul Keen, *Mary Wollstonecraft in Context*, Cambridge, Cambridge University Press, 2020, 155-163．ウルストンクラフトと英国の急進派の関係性については山上正太郎，『フランス革命と一人の女性―メアリ・ウルストンクラフトの生涯』社会思想社，1997，24-25.

[70] 'the nature of reason must be the same in all.' Wollstonecraft, *The Vindication*, 55.

[71] Ibid.25-26.

[72] 'I may be accused of arrogance: still I must declare, what I firmly believe, that all the writers who have written on the subject of female education and manners from Rousseau to Dr.Gregory have contributed to render women more artificial, weak characters, than they would otherwise have been; and consequently, more useless to society.' Ibid.22.

[73] 'Educate women like men' and the more they resemble our sex the less power will they have over us. This is the very point I aim at. I do not wish them to have power over men, but over themselves.…Educate women like men' and the more they resemble our sex the less power will they have over us. This is the very point I aim at. I do not wish them to have power over men, but over themselves.' Ibid.65.

[74] 'The respect paid to wealth and beauty is the most certain and unequivocal and…will always attract the vulgar eye of common minds. Abilities and virtues are absolutely necessary to raise men from the middle rank of life into notice.' Ibid.59.

[75] 'Make them free, and they will quickly become wise and virtuous, as men become more so; for the improvement must be mutual, or the justice which one half of the human race are obliged to submit to, retorting on their oppressors, the virtue of man will be worm eaten by the insect whom he keeps.' Ibid. 192.

[76] 梅垣『女性の権利を擁護する』48．水田珠枝『女性開放思想史』ちくま学芸文庫，1994, 66.

[77] ‘they will not fulfill family duties, unless their minds take a wider range.’ Wollstonecraft, *The Vindication*, 190.
[78] 梅垣『女性の権利を擁護する』112.
[79] Wollstonecraft, *The Vindication,* 2.
[80] “11. Jean-Jacques Rousseau and Mary Wollstonecraft: Restoring the Conversation as recalled by Virginia Sapiro and Penny Weiss,” (ed.) Maria J. Falco, *Feminist Interpretations of Mary Wollstonecraft*, Pennsylvania, The Pennsylvania State University Press, 1996, 189.
[81] 梅垣『女性の権利を擁護する』68-69.
[82] ‘The personal reserve, and sacred respect for cleanliness and delicacy in domestic life, which French women almost despise, are the graceful pillars of modesty; but far from despising them, if the pure flame of patriotism reached their bosoms, they should labour to improve the morals of their fellow citizens, by teaching men, not only to respect modesty in women, but to acquire it themselves as the only way to merit their esteem.’ Wollstonecraft, *The Vindication*, 19.
[83] ‘And, modesty, the fairest garb of virtue! has been more grossly insulted in France than even in England, till their women have treated as prudish that attention to decency which brutes instinctively observe.’ Wollstonecraft, *The Vindication*, 2.
[84] 啓蒙フランスにおける礼儀作法については Philippe Raynaud, *La politesse des lumières : les lois, les mœurs, les manières*, Paris, Gallimard, 2013, 5-50.
[85] ‘in France the very essence of sensuality has been extracted to regale the voluptuary, and a kind of sentimental lust has prevailed, which, together with the system of duplicity that the whole tenor of their political and civil government taught, have given a sinister sort of sagacity to the French character, properly termed finesse, and a polish of manners that injures the substance, by hunting sincerity out of society.’ Wollstonecraft, *The Vindication*, 2.
[86] ‘In France, there is undoubtedly a more general diffusion of knowledge than in any part of the European world, and I attribute it, in a great measure, to the social intercourse which has long subsisted between the sexes.’ Ibid.2.
[87] Ibid.7.
[88] Ibid.85.
[89] ‘The comparison with the rich still occurs to me; for, when men neglect the duties of humanity, women will do the same; a common stream hurries them both along with thoughtless celerity. Riches and honors prevent a man from enlarging his understanding and enervate all his power by reversing the order of nature, which has ever made true pleasure the reward of labour. Pleasure-enervating pleasure is, likewise, within women’s reach without earning it. But till hereditary possessions are spread abroad, how can we expect men to be proud of virtue? And till they are, women will govern them by the most direct means, neglecting their dull domestic duties, to catch the pleasure that is on the wing of time.’ Ibid.67.
[90] ‘The seeds of false refinement, immorality, and vanity previously shed by the hereditary great.’ Ibid.8.
[91] ‘To satisfy their genius of men, women are more systematically voluptuous, and though they may not carry their libertinism to the same height, yet their heartless intercourse with the sex, which they allow themselves, deprives both sexes, became the taste of men is vitiated; and women, of all classes, naturally square their behavior to gratify the taste by which they obtain pleasure and power.’ Ibid.109. Barker-Benfield G.J. ‘Mary Wollstonecraft: Eighteenth-Century Common wealth woman’ *Journal of the History of Ideas*, Jan.-Mar., Vol.50. No.1, 1989, 109.
[92] Ibid.8. ウルストンクラフトは究極的には女性の影響のもと社会全体の道徳心が荒んでいくと指摘する．‘Women as well as despots have now perhaps more power than they would have if the world…was governed by laws deduced from the exercise of reason, but in obtaining it, to carry on the comparison, their character is degraded, and licentiousness spread through the whole aggregate of society.’ Ibid.41.
[93] ‘but the whole female sex are, till their character is formed, in the same condition as the rich: for they are born, I now speak of a state of civilization, with certain sexual privileges, and whilst they are gratuitously granted them, few will ever think of

works of supererogation, to obtain the esteem of a small number of superior people.' Ibid.59-60. Barker-Benfield, "Mary Wollstonecraft" 108-109.

[94] 'Remained immured in their families.' Ibid.3.

[95] 'in defining modesty it appears to me equally proper to discriminate that purity of mind, which is the effect of chastity, from a simplicity of character that leads us to form a just opinion of ourselves, equally distant from vanity or presumption, though by no means incompatible with a lofty consciousness of our own dignity.' Ibid.131.

[96] 梅垣『女性の権利を擁護する』72.

[97] 'The personal reserve, and sacred respect for cleanliness and delicacy in domestic life, which French women almost despise, are the graceful pillars of modesty; but far from despising them, if the pure flame of patriotism reached their bosoms, they should labour to improve the morals of their fellow citizens, by teaching men, not only to respect modesty in women, but to acquire it themselves as the only way to merit their esteem.' Ibid.19.

[98] Ibid.78.

[99] ウルストンクラフトは当時のイギリス社会に影響を及ぼした教育論者トマス・デイを通じてルソーや古代ギリシャの肉体と精神の相関関係についての考えの影響を受けた.

[100] Ibid.83-84.

[101] Ibid.74.

[102] 'In a firmer tone, I pay particular attention to those in the middle class, because they appear to be in the most natural state. Perhaps the seeds of false refinement, immorality, and vanity have ever been shed by the great. Weak, artificial beings raised above the common wants and affections of their race, in a permanent unnatural manner, undermine the very foundation of virtue, and spread corruption through the whole mass of society'.

[103] Ekawati Marhaenny Dukut and Farhana Malik, "Wollstonecraft and Friedan's Theories Highlight the Women Struggles in Julius Caesar." *Celt*. Vol.13. No.2, December 2013:187-209.

[104] Offen, *The Women Question in France*,16.

謝辞

本論文は令和 4 年大妻女子大学戦略的個人研究費 N2208 の恩恵を受けて実現することができた. 勤務校の大妻女子大学の長年に渡る有形無形の厚い支援に対して深い感謝の意を申し上げる. さらに二人の査読者から貴重な時間と大変に有益なコメントを頂いて書き進めることができた. 深く感謝申し上げる.

Abstract

This paper compares two distinct ideas on ethical liberty inherent in two versions of womanhood in Enlightenment France, one championed by republican motherhood, focusing on the reproductive function of women, the other derived from *Doux commerce* theory, highlighting the benevolent social influence of women. More specifically, such thinkers as Montesquieu and Hume considered the art of conversation as practiced by female hostess of French salons one of the sources of social morality, as they function as peacemakers who reconciles the various opinions of her male audience. By contrast, Rousseau opposed this idea and considered the reproductive function of women as the very basis of their social morality, updating the discourse on Republican motherhood. Wollstonecraft took Rousseau's ideas on womanhood one step further and considered motherhood as rooted in the biological perspective of womanhood, the very moral foundation for women's political right. As a result, Wollstonecraft's theory of women's rights can be seen a political thought with republican tendencies that places constraints on women's civil rights, as it potentially lacks the perspective of women's ethical freedom in reproduction from our contemporary perspective.

（受付日：2023 年 10 月 31 日，受理日：2025 年 4 月 3 日）

武田　千夏（たけだ　ちなつ）
現職：大妻女子大学比較文化学部教授

プロフィール：
ロンドン大学博士後期課程修了．PhD．大妻女子大学比較文化学部教授
著者は政治思想，ジェンダー，文化史の観点から，フランス革命期を中心とするヨーロッパ近代史について研究している．https://chinatsutakeda.com/

主な著作・論文に，“Madame de Staël,” *Nineteenth-Century Literature Criticism*, (ed.) Rebecca Parks, Vol.427, Farmington Hills, Gale, 2023, 135-292. ‘De Staël’s *Considerations on the Principal Events of the French Revolution*,’ *Bloomsbury History: Theory and Method*, 「フランス革命とジェンダー」,『論点・ジェンダー史学』, ミネルヴァ書房, 2023 年 5 月, 42-43.「フランス自由主義とは何か」,『人間生活文化研究』(32), 2022 年 3 月，259-276．*Mme de Staël and Political Liberalism in France*, Palgrave Macmillan, Singapore, 2018. ‘On a liberal interpretation of the French Revolution,’ *Germaine de Staël: Forging a politics of mediation*, (ed.) Szmurlo Karyna, Oxford University Press, 2011, 91-108.